

# 上北沢桜並木街区の歴史

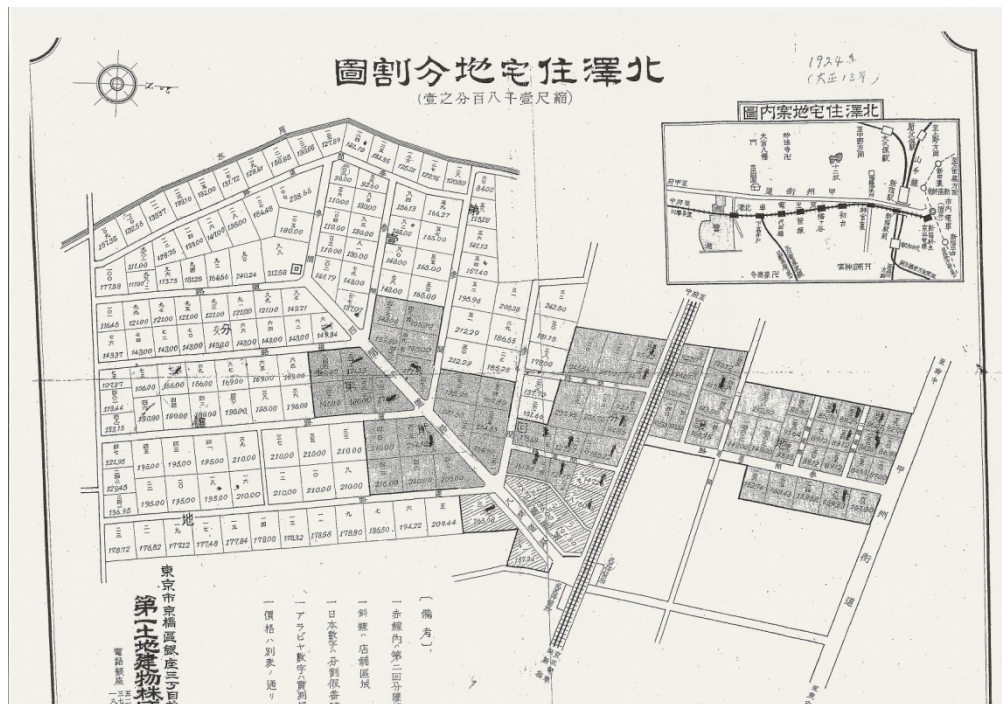
## — 肋骨通りの謎 —

京王線上北沢駅の南には、重厚な桜並木を中心にして、それから左右に四本ずつの道路が斜線に伸びる「肋骨通り」と通称される特徴的な区画をもつ住宅街区がある。現在は、「せたがや百景」（昭和59年に世田谷区が選定）に選ばれると同時に、平成11年に世田谷区が制定した風景づくり条例に基づく「地域風景資産」に選定されている。しかし、不思議なことに、その発祥とその歴史については、東京都史や世田谷区史、近代日本住宅開発史の中でもほとんど知られてこなかったため、ここで改めてご紹介してみたい。

### 1 上北沢桜並木周辺の住宅街区の成立

#### ●関東大震災直後の街づくり

上北沢の桜並木を中心とした住宅街区（以下、「上北沢桜並木街区」という。）は、大正12年9月1日の関東大震災によって東京が壊滅したことを知った木村泰治（当時、台湾土地建物会社社長）が、東京復興のための街づくりを志して大正13年4月に第一土地建物株式会社（京橋区銀座3-1-7）を設立し、地元の鈴木宗之氏ら関係の地主から土地を買収して造成し、同年の10月14日から販売を始めたものである。<sup>1</sup>



(北澤住宅地分割図 大正13年)

開発総面積は、29,633.96 坪、道路率は 13.6%であり、宅地を 132 口数に分割したため、一口の平均は約 194 坪になった。そして、上水道のほか、道路に沿って開渠式のコンクリートの下水道を敷設し、住宅の敷地は生垣によって囲んだ。<sup>2</sup>

台湾の会社が東京に進出した経緯について、木村は、「樺太に出張し、大泊において埋め立ての町づくりを計画していたが、関東大震災の知らせを聞いたので、『さあ大変』と急いで上京し、東京の復興に貢献する観点から住宅街を建設する計画を立てた。」と回顧している。<sup>3</sup>

一方、上北沢の郷土史を記した『わたしたちの郷土』には、「左内町の造成」として、「道も大八車の通るようなものが 2、3 本あっただけのを会社が区画整理をして、現在のような肋骨型の立派な道をつくり、並木として桜を植え、住宅地として体裁を整えて 200 坪単位で分譲した。」「有力者が多かったので運動し、電気、水道などよそよりも早く設備された。」と記述されている。<sup>4</sup>

木村が上北沢住宅街区の造成を通じた震災後の東京の復興にかけた情熱について、戦後に書かれたた自叙伝においては次のようにある。<sup>5</sup>

現在（筆者注 昭和 35 年）、東京は世界第一の人口を擁し、大規模な都市計画も進められてはいるが、近郊に計画的な町づくりをする人はやはり少ないようだ。これはなぜだろう。個人の金儲けにならないためなのだ。

私は北沢（筆者注 現在の北沢）を開く時、資金は、台湾で社長をしていた台湾土地建物会社の資金百五十万円を、臨時に融資して、大正 13 年第一土地建物株式会社を、銀座三丁目に創立したが、実は、台湾会社の株主からは大反対をうけた。東京の住宅地を、台湾の金で開くことは不当だというのである。私は、「台湾の会社に結局損をしないようにするから、しばらくの間、国の為だと思って見て貰いたい。」と説得して、北沢の計画に入ったのだ。これによって、私個人は少しも利得がなかったが、台湾の株主には迷惑をかけずにすんだ。今、省みても意義のある仕事をしたと思っっている。



（「読売新聞」大正 13 年 10 月 19 日より）

## ●木村泰治の経歴

第一土地建物（株）社長の木村泰治は、お茶の水のニコライ堂で有名なロシアの宣教師のニコライに漢学などを教えた木村讓齋の四男として生まれ、二葉亭四迷に知己を得た後、新聞記者をしていたが、明治42年に台湾に台湾土地建物会社が創立されるとともに入社し台湾の街づくりに当たった人物である。<sup>6</sup>

木村は、台北の窓口である基隆の港灣の都市づくり（明治43年）、初めての日本人向けの質の高い住宅専用地域の大正町の造成（現在の台北市中山区。明治44年）をはじめ数々の町づくりを手がけた。

この台北市大正町の造成の経験は、台風により壊滅した後の台北の復興の一貫として行ったものであり、後に木村が関東大震災によって壊滅した後の東京の復興を目指して新たに開発した上北沢桜並木街区造成の原体験となったものである。

木村は、このほか、草山温泉（陽明山に所在）という台湾初めての温泉・別荘地の開発のほか、嘉義市、高雄市の造成を手がけるなど、当時には珍しく大規模な計画的都市づくりに豊富な経験をもつ事業者であった。基隆市に見られるように、木村が手がけた新都市づくりでは、碁盤の目のような道路を敷設し、商業地区、住宅地区などが分かれた整然とした町を造成してきた。

木村は都市づくりにとどまらず、台湾に所在した電力、ガス、銀行、自動車など、主要企業の役員を歴任した上、台湾商工会議所会頭に就任している。また、戦後の余生は、福島県の岳温泉の開発に多大な貢献をしている。<sup>7</sup>

このように木村は、豊富なビジネス感覚と国際感覚を持ち合わせて町づくりを手がけた人物であった。

## ●郊外型住宅地としての先駆モデル

当時、上北沢駅は、「北澤」と呼ばれ、桜並木との京王帝都電鉄の交差点（現在の踏み切りのところ）にあり、大正13年には次のような分譲広告が行われていた。<sup>8</sup>

郊外に住宅を選ぶとしたら

△周囲森林に囲まれ冬暖かく夏涼しきところ

△南下りの日当たりよく付近風致に富むところ

△道路、下水完備し霜どけに路ぬからず、流しもとの吸い込み穴もいらぬところ

△郊外電車の停留場に直接し、しかも市電、省電との連絡もよく、かつ、国道に沿うて乗合自動車もあるところ

△田園の景観を具えて、しかも、別荘地や隠居場でなく市内通勤に至極のところ

△単価なるべく低く年賦の便法のあるところ

△こんな難しい希望にかなうところ

△京王電車の北澤にご一報ください。

この案内から、読み取れることは、上北沢桜並木街区は、大正初期に造成された新町（現在の桜新町から深沢）のような富裕層向けの別荘地としてではなく、郊外電車やバスによる都心への通勤を前提として、中産階級向けに豊かな住環境を用意する、職住分離の新しいライフスタイルを提供する住宅地として構想されていたことである

都心から離れるものの、自然環境が豊かで、整然とした区画の中で広めの敷地と幅の広い道路に加え、当時この地域ではまだ普及が遅れていた下水、電気や水道などのインフラも近隣の地域よりも先がけて完備し、都心に住んでいた人々に対しても魅力を高めた。

上北沢桜並木街区は当時の時代の最先端をいくものであり、「田園都市型」の郊外型住宅地開発の先駆モデルを提供し、歴史的に大きな貢献をした地域である。

### ●斜線道路による特徴的な区画設定

上北沢桜並木街区が他の都市開発区域と際立って異なる特徴は、いわゆる「肋骨通り」といわれるように桜並木を中心に斜めの道路が伸びていることである。

これは、上北沢で初めて実現した、木村泰治の独創的なアイデアであった。

木村は、「それまでの私の台湾の町づくり、みな、碁盤の目にこしらえて、対角線の大道路をつくることをしなかった。これはやはり弊害もあることがわかっていたので、北沢の場合はどうしようと、一週間ばかりの間、北沢の地図を銀座の事務所の机の上において、毎日睨んでは考えていた」ところ、友人から、「端から端に、斜めに対角線を引いて、それを幹線にしたらどうです。」と言われ、「私はハッと思った。これは名案だ。どうしてこんな簡単なことに気づかなかったのか。こうして北沢の町はでき上り、立派に開けた。」と回想している。<sup>9</sup>

このように、いわゆる「肋骨通り」による区画・道路の配置は、未墾地の多かった台湾で数多くの新都市開発を手がけてきた木村の経験と国際的な見識を上北沢において独創的に展開した成果であった。全国には、多くの住宅地が造成されてきたが、「肋骨通り」のような街路のある住宅地の例は聞かない。

## 2 日本の近代史における上北沢住宅街区

### ●田園都市構想

経済の発展にともなう都市問題の深刻化に対して人間性の復活を訴えたイギリスのレッチワースが、1898年に「田園都市構想」を提唱しはじめて以来、我

が国の都市計画にも大きな影響を与えてきた。内務省地方局有志が『田園都市』（明治40年、1907年）を出版して我が国にその思想を導入し、我が国においてもその影響を受けて、都市計画法が制定（大正8年、1919年）されたことは有名である。

我が国で「田園都市構想」が唱えられた背景には、明治以降、急速な都市化と人口集中が進む中で、特に、第一次世界大戦の中で、我が国の工業化が進み、所得の豊かな中産階級層が形成される一方、都心部の住宅問題が深刻となり、郊外における優良な居住環境の整備の必要性についての認識が高まっていたことがある。<sup>10</sup>

このような流の中で、郊外電車路線の整備とともに、東京では全国に先駆けて、民間のデベロッパーが郊外優良住宅地の計画や開発をはじめていたが、関東大震災は、そのような動きを加速化させることになった。

当時、郊外電車路線の発達により「田園都市型」による職住分離のライフスタイルが発展していった様子について、大正14年12月の『時事通信』は次のように伝えている。<sup>11</sup>

近頃の郊外の発展は驚く可きものがある。昨日まで芋や大根の畑であった所が今日は作物の全部が抜き去られて地均しした上に地縄が張られる。と思うまに忽ちの内に紅い瓦屋根の文化住宅か何かが出来上って洋服を来た女の子がぶらんこに乗っている光景が現出する。今や東京は大震災を境にして水面に落ちた油のように末広がりに郊外に向ってふくらんで行きつつある。言葉通り大東京である。こうした郊外の大発展に伴って都会生活者の生活様式に大きな変化が来た。変化とは何かと云えばオフィスは都会に、住宅は郊外にと云う傾向である。欧米の例を待つ迄もなく埃と塵と煙と喧噪との他何もものもない都市居住者が一日の仕事を終った後でせめては青い木の葉と広い野位見える家に帰ってホッとしたいと願うのは自然の要求で、社員にしろ街に店を持つ者にしろ滔々として郊外へ流れ出して行くのは無理のない所である。

記録にある範囲で、東京における「田園都市型」の住宅地開発が行われた地域を古い順に並べると次のとおりである。<sup>12</sup>

① 新町（現在の桜新町から深沢7,8丁目）

1913年（大正2年）、東京信託会社（日本不動産）が、「東京の軽井沢」というキャッチフレーズで、桜並木をもつ別荘地として世田谷区に住宅分譲を実施した。これが日本初の住宅分譲といわれている。

なお、この「新町」は、戦後、国道246号線によって街区が分断され、現在は、当時の姿をそのままの形では留めていない。

## ② 田園調布

1918年（大正7年）に渋沢栄一、中野武當（東京商工会議所会頭、初代社長）らが中心となって、田園都市株式会社を設立。大正12年から洗足地域、大正13年から多摩川台地区（現在の東横線田園調布駅前）の分譲開始。

## ③ 目白文化村

軽井沢の開発を手がけた箱根土地開発株式会社（現西武不動産販売）が、1922年（大正11年）から分譲開始。（現在の新宿区中落合）

## ④ 上北沢

1923年（大正12年）の関東大震災直後、第一土地建物株式会社が造成し、翌年の大正13年秋から直ちに分譲開始。

## ⑤ 成城学園前

1924年（大正13年）に成城学園後援会地所部が発足し、区画整理と校舎建設を開始。大正14年に4棟の住宅が建設。

## ⑥ 国立駅前

同じく箱根土地開発株式会社が、1925年（大正14年）から分譲開始。

建設省関東地方建設局がまとめた『多摩川誌』は、「1915年に甲州街道に沿う京王電鉄、1927年には小田原急行電鉄が新宿に通じた」後の世田谷の郊外型住宅の発展について、「当時洋風をとり入れたモダンな住宅建築を文化住宅と称し、その集在地を文化村といった。田園調布・成城・自由ヶ丘・上北沢などはその例で、住宅地建設の模範とされた。」の評価している。<sup>13</sup>

特に、上北沢桜並木街区の造成は、関東大震災を直接のきっかけとして計画され、1年弱で造成し、分譲を開始するという、極めて短期間で事業を実現させたものである。震災直後の郊外型の住宅開発という点からは、同種のものの中で最も計画が早く進んだ地区であった。

このように極めて短期間のうちに広大な地域の開発が実現できたのは、木村泰治に、台風により壊滅した後、迅速に台北の復興のために住宅開発を造成した経験と情熱があったからであろう。

これらの民間デベロッパーによる先駆的な宅地開発の成功に触発されながら、地元住民による区画整理事業の動きが活発化していき、大正8年に制定された都市計画法に基づき、荏原第一区画整理（大正13年）など、終戦にいたるまで

宅地造成のための 42 の区画整理事業が行われ、郊外の住宅地の開発が広範に進んだ。<sup>14</sup>

### 3 上北沢桜並木街区の特徴

#### ●世田谷区において現存する最も古い近代郊外住宅の街区

我が国で計画された郊外型住宅の開発の歴史の中で、上北沢桜並木住宅街区は、都内では 4 番目、世田谷区内では 2 番目に古い大型開発地域である。また、全国の郊外住宅地の開発の歴史の中でも先駆的な存在である。<sup>15</sup>

日本を代表する田園調布とほぼ同時期に分譲されながらも、世田谷区内で有名な成城、代沢地区などよりも早く計画、開発されている。

そして、第二次世界大戦中、上北沢桜並木街区には戦禍による損傷もほとんどなかった。また、「新町」（現在の桜新町から深沢 7,8 丁目）のように街区を貫く大きな道路の敷設によって街区が分断されることなく、桜並木や街区と閑静さがほぼそのまま温存されており、世田谷区内に原型をとどめる近代郊外住宅の街区で最も古いものである。

#### ●桜並木を街路樹としてもつ住宅地として世界の先駆け

現在、日本全国に桜並木のある住宅地は数多く存在するが、近代日本の住宅の歴史において、初めて住宅地の街路樹としてソメイヨシノを使ったのは、「新町」といわれており、上北沢桜並木街区は、これに続いて、全国で 2 番目である。

我が国には、古くから、神社や仏閣、城の堀端、河川、湖畔、山道沿い、公園や校庭に桜を植えてそれを愛でる伝統があるが、意外にも、住宅地の街路樹としてソメイヨシノを植林する歴史は浅いからである。

しかし、「新町」は、戦後、国道 246 号線によって町が寸断され、当時の面影を失ってしまったため、上北沢桜並木街区は、造成された当時の住宅街区とそれに一体となった桜並木の面影をほぼそのまま現在に伝えるものの中で、我が国の中でも最も古いと考えられる。

今後の詳細な研究を待つ必要があるが、そもそもソメイヨシノが日本原産であることを踏まえると、造成された当時の住宅街区とそれに一体となった桜並木の面影をほぼそのまま現在に伝えるものの中で、上北沢桜並木街区は、ひょっとすると、世界の中でも最も歴史の古いものに数えられる可能性がある。<sup>16</sup>

#### ●「田園都市型」ライフスタイルを創造したモデル地域

上北沢桜並木街区は、大正 8 年に都市計画法が制定されるなど、都市化に

対応するため優良な郊外住宅地域づくり（「田園都市構想」）の機運が高まった時代の流れの中で、田園調布とほぼ同時期に分譲がはじまった住宅地域であり、職住分離とモダンな「文化住宅」により、当時の先端的なライフスタイルを創造する役割を担った。

上水道、電気、道路にそった下水道、周囲を生垣で囲み玄関先に松の木を植えるなど、戦前の郊外型住宅のモデルとなった。

その後、東京郊外で、区画整理等を通じた農地の住宅地開発が急速に進むことになるが、それらの先駆的モデルとしての役割を果たした。

### ●国際的な経験を反映した住宅街区

上北沢桜並木街区は、開発の規模は小さいが、道路・区画の配置、幅の広い道路、桜並木の植林など、日本離れした街区と景観をもっている。

これには、開発者が台北で初めて計画的に造成された日本人向けの高級住宅専用地域をはじめ、台湾における様々な都市づくりの経験をそしゃくした上で、日本の実情に合わせて反映させたことがあると考えられる。

現に、台湾土地建物（株）が1923年に第一土地建物（株）を設立する際、「台湾に於いて長年月の経験を積みたる住宅地経営、家屋建設事業を帝都に延長せんと欲し確実なる打算のもとに計画をすすめ」と表明している。<sup>17</sup>

このように国際的な交流の上で建設された上北沢桜並木街区は、日本の建築史上も貴重な資産となっている。

### ●独創的な斜線型の区画・道路の配置

景観という点では、田園調布（多摩川台）は、駅舎を中心に円弧が広がる特徴的な道路と区画で有名であるが、上北沢とその後開発された日吉を除きほとんどの町づくりにおいては、碁盤の目のような区画・道路の配置がなされている。

上北沢桜並木街区では、太い桜並木を中心基軸として、左右対称に「肋骨」のように斜めに伸びる広めの道路は、住宅地の奥行きと立体感を生み出し、住宅地としての品格と風格を格段に高めた景観を生み出している。住宅地や都市の開発経験の豊かな木村泰治の独創によって生み出されたこのような区画・道路の配置の例は、全国でも他に例を見ない。

戦後、周辺の急速な市街化にもかかわらず、閑静で格調の高い住宅地域が維持され、巨人軍の長嶋茂雄選手をはじめ、我が国を代表する芸術家、文化人、学者、政治家、実業家などを引き付けてきた。

現に、このように街区と一体となった桜並木を中心とする景観は、特徴的であり、町の創設とともに、住民、区民にも広く親しまれ、「せたがや百景」

(昭和59年)に選ばれると同時に、平成11年に世田谷区が制定した風景づくり条例に基づく「地域風景資産」に選定されている。<sup>18</sup>

### ●閑静な住宅環境の維持の仕組み

上北沢は、甲州街道という幹線道路からは遠くないものの、造成当時、電車（京王帝都電鉄）とバス（甲州街道）による通勤を前提とした住宅専用地域として整備されていた。

住宅地の中には桜並木を植えた太い道路を敷設しながらもあえてそれを貫通させず、住宅地の閑静さを維持するような工夫が見られる。

また、台湾におけるゆったりした都市づくりの経験を反映し、開発事業者としては採算性を悪化させるものの、幅広い道路の確保など、民間住宅地開発にしては贅沢な公共空間を整備した。これには、関東大震災の経験を踏まえ、防災対策も意識していた面もあると思われる。<sup>19</sup>

## 4 おわりに

「肋骨通り」と通称される上北沢桜並木街区は、桜並木を中心とする特徴的な景観により住民や区民に親しまれているだけではなく、我が国の郊外住宅地開発史の中で見ても、とても古く、ユニークな歴史をもった貴重な地区である。

美しさと風格を備えたこの街区は、依然として将来への街づくりへの生きたモデルとなりうるものであり、今後とも、住民や区民のみならず、国民共通の資産として後世に引き継いでいきたいものである。

(執筆 石井裕晶)

---

<sup>1</sup> 上北沢桜並木住宅街区の歴史が建築史上、学術的に紹介されたのは、陳正哲『植民地都市景観の形成と日本生活文化の定着—日本植民地時代の台湾土地建物株式会社の住宅生産と都市経営—』（2004年東京大学工学系研究科博士論文。藤森照信研究室）が嚆矢（はじめ）である。

<sup>2</sup> 前掲 陳論文 p118

<sup>3</sup> 木村 泰治『地天老人一代記 —木村泰治自叙伝—』岳温泉株式会社 1960/04。p141-144

<sup>4</sup> 上北沢・桜上水郷土史編纂会『わたしたちの郷土』昭和52年7月、p.159-160。

<sup>5</sup> 前掲『地天老人一代記 —木村泰治自叙伝—』p143

<sup>6</sup> 泰治の父、木村讓齋は秋田の大館藩出身であったが、幕末に函館に私塾を開き、警備にあたる兵士に医術や漢籍を教えていた。御茶ノ水のニコライ堂で有名なロシアの宣教師ニコライ・カサトーキンが1861年に来日すると、函館で讓齋について学び、日本に関する知識などを吸収した。泰治もこのような環境におかれていた。

<http://www.wp-honest.com/magata/seikyukai.html>

<sup>7</sup> 木村泰治は明治4年、木村謙斎・スエの四男として秋田県大館に出生。

明治19年(1886年)上京し、東京英語学校に入学。同28年内閣官報局に就職。二葉亭四迷の知遇を得て、四迷は新聞記者への転職を勧め、台湾日報の知人を紹介した。台湾に渡った泰治は知人の奨めで台湾日々新聞の記者となり編集長に昇格した。

その後、明治41年には実業家に転進し、台湾随一の実業家となり、台湾商工会議所の初代会頭に就任。台湾土地建物会社支配人のほか、台湾瓦斯、台湾煉瓦、高砂麦酒、台湾電力、台湾製紙、台湾貯蓄銀行、太平洋炭鉱、嘉義電灯、金瓜石鉱山、東海自動車等などの役員、台北魚市、台北中央市場、南邦自動車等会社社長を歴任。

そして、1920年以来、台北市、台北協議会員、総督府評議員、1937年に台北商工会議所副会頭、1940年会頭、1942年東亜経済懇談会台湾委員長、在台日本人会長となり、1944年に帰国し、戦後、台湾の会を創立。

泰治は、戦後、福島県の安達太良山の岳温泉の開発にも携わった。土地6町歩と温泉のすべての権利を6万円の巨費で買い取り、道路を整備するとともに、湯元から長さ1間の松製管を4千本以上つなぎ合わせて引湯し、温泉開発に成功したという。

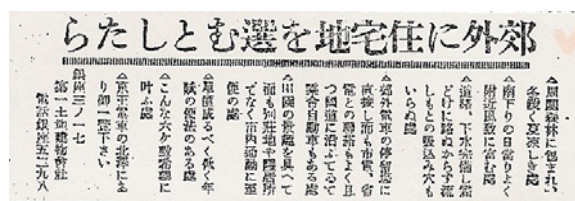
泰治の理念は、「広大な私有地を開放し、児童遊園地・高山植物園・緑地帯などを造り、温泉を国民大衆のものとする。」というもので、安達太良山・岳温泉の国立公園指定、国民保養温泉指定を実現し、県営くろがね小屋新設などの促進を図るため、観光施設の開発・充実に私財を投じた。温泉は、昭和30年に全国7か所の国民保養温泉の1つに指定された。

昭和36年2月16日に92歳の天寿を全う。国立公園開発の功労などにより勳三等瑞宝章を贈られた。

<http://www.city.nihonmatsu.lg.jp/history/jinbutu/kimura.html>

<http://nrch.cca.gov.tw/ccahome/website/site20/contents/004/cca220003-li-wpkbhisdict000519-0197-u.xml>

<sup>8</sup> 「読売新聞」大正13年10月26日及び大正13年11月30日より



<sup>9</sup> 前掲『地天老人一代記 —木村泰治自叙伝—』p143

<sup>10</sup> 西山康雄『日本型都市計画とは何か』2002年3月15日p81-103。

---

内務書記官岡田文秀「都市計画の法制と其の運用」『都市公論』第八卷第八号（大正13年）によれば、文化運動の都市計画運動の意義として、都市計画は市民の健康の増進、市民の労働の能率の増進、市民の生活を愉快にすることを掲げ、都市美や都市景観もこれに属すると指摘している。

<sup>11</sup>『時事通信』大正14年12月1日、2日 神戸大学電子図書館より引用。  
同記事には続けて当時の鉄道網の整備について次のような記述がある。上北沢桜並木街区が分譲されたときは、小田急線は開通していなかった。

大正元年には東京の郊外を廻る電車といえば玉川、王子、京成、京浜の四社っきりで、玉川は渋谷から玉川まで五哩五五鎖、王子は大塚から飛鳥山まで一哩四二鎖、京成は押上から小岩、高砂から柴又まで合計六哩七二鎖、京浜電車は品川から神奈川、大森から海岸、麴谷から穴守、川崎から大師の各線で十六哩二八鎖。此四社の総計哩数が僅に二十九哩九七鎖にすぎなかったのであった。それが翌二年から京王電車も出来れば王子、京成、京浜共に延長し、其後続々と新会社が出来て大正十四年の八月現在では社数に於て実に十四社哩数に於て合計百〇四哩八六鎖と云うすばらしい大発展を来して来て居るのである。念の爲めに現在の郊外電車の名を挙げて見ると次のようである。玉川（一一哩七五鎖）王子（五、四〇）京成（二四、二〇）京王（一四、三二）城東（三、六七）西武（四、〇二）京浜（一七、七〇）玉南（一〇、一〇）池上（三、四〇）目黒蒲田（八、三〇）海岸電気軌道（二、〇八）これだけが現に運転して居るものでこの他に、また開業していないものに武蔵鉄道、小田原急行鉄道、東京横浜電鉄の三社があるわけである。十年一日というが僅な星霜の間によくもかう発達したものと驚かれるばかりである。

<sup>12</sup> 東京都都市計画局地域計画部都市計画課・総務部相談情報課編『東京の都市計画百年』平成元年3月、p. 23-37。 世田谷区都市整備部都市計画課発行『世田谷区まちなみ形成史』平成4年3月、p. 103-122。

なお、規模は小さいが、大正11年に個人の和田工務店が甲州街道沿いに26戸の賃貸住宅（「和田住宅」）を建築した例がある。現在の南烏山4丁目の一角にあり、平塚らいてふなどの文化人が住みつき、歴史的に意義のある住宅街区であったが、住宅と一体となって整備されていた池や公園は、保存されることなく烏山中学校の敷地として消滅。

<sup>13</sup> 建設省関東地方建設局京浜工事事務所企画、多摩川誌編集委員会編集、財団法人河川環境財団発行『多摩川誌』昭和61年3月29日発行

<sup>14</sup> 前掲『世田谷区まちなみ形成史』p. 116。

<sup>15</sup> 関西では、池田室町住宅地分譲（明治43年）、宝塚の雲雀丘（大正5年）、千里山田園都市（大正10年）らの開発がなされたが、芦屋の六麗荘（昭和4年）をはじめ、全国で郊外型住宅地の住宅地の開発が本格化するののは、昭和になってからである。（片

---

木篤、藤谷陽悦、角野幸博編『近代日本の郊外住宅地』2000年3月、鹿島出版会。）

<sup>16</sup> 海外の桜の名所としては、アメリカの首都ワシントンDCのポトマック河畔のソメイヨシノがおそらく最も有名であるが、これは日米親善のため、当時の尾崎行雄東京市長が約3000本のソメイヨシノの苗木を寄贈し、1914年に植樹に成功したものである。

それに先立ち、ソメイヨシノの美しさに魅せられた農務省の植物探索研究者のフェアチャイルド博士が、アメリカに植樹することを考え、1907年、アメリカで初めて自宅（ワシントン郊外のメリーランド州のChevy Chase）での植樹に成功していた。

ワシントンDC周辺で、ポトマック河畔に次いで有名な桜の名所が、同じく郊外のメリーランド州のBethesdaという町にあるKenwoodという住宅地である。ここは、郊外型の高級住宅地として開発され、ソメイヨシノを街路樹として用いているが、造成されたのは1930年代である。（隣接のゴルフクラブの設立が1928年）

上北沢が、街路樹としてソメイヨシノを用いた郊外型住宅地の中で日本の中で先駆的であるということは、そのようなものとしては世界の中で最も古いものに属する可能性が高い。

（参考）

<http://www.nps.gov/nama/planyourvisit/cherry-blossom-history.htm>

[http://aranishi.hobby-web.net/3web\\_ara/sakura.htm#chapter1](http://aranishi.hobby-web.net/3web_ara/sakura.htm#chapter1)

<sup>17</sup> 前掲 陳論文 p.116

<sup>18</sup> 「上北沢の家（設計・吉村順三設計事務所）」『新建築』（57(8) [1982.08] p174～183）にあるように、建築的に見て注目すべき住宅も建設されている。

<sup>19</sup> 昭和20年2月、米軍の飛行機が撃墜されて上北沢住宅街区に墜落したが、太巾の道路により、近隣に類焼することはなかった。